

平城京右京八条二坊十一坪(西市跡推定地)  
発掘調査概要報告書

1990

大和郡山市教育委員会

## 序 文

大和郡山市教育委員会が、平城京跡の継続的な発掘調査を開始して日も浅いが、この間、特に重要なと思われる箇所については鋭意調査を進めてきた。昭和60年から62年にかけては、清掃センター周辺整備事業に伴う大規模な調査を行い、多大の成果を得ることができた。また、小規模な調査も年間十指に余るほど実施しており、徐々にではあるが京の南辺部の様相が明らかになってきている。

この報告書は、昭和63年～平成元年に行った平城京右京八条二坊十一坪の発掘調査の成果をとりまとめたものである。この調査地は、平城京の中でもとりわけ重要な西市跡に当たり、たいへん注目される場所である。西市跡の解明に資するところがあったと確信している。

こうした重要な地点で調査が実施できたのも、地元の方々の御理解、土地所有者の御協力があつたからである。諸氏の御厚情に深く謝意を表する次第である。

平成2年3月20日

大和郡山市教育委員会

教育長 井 上 三 夫

## 例　言

1. 本書は、大和郡山市教育委員会（教育長井上三夫）が実施した平城京右京八条二坊十一坪（西市跡推定地）の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和63年度国庫補助事業（総額3,000,000円、内、国庫50%・県費25%）として実施した。なお、本書の印刷製本は、平成元年度市単独予算で対応した。
3. 現地調査は、社会教育課技師服部伊久男・山川均が担当した。なお、調査に際しては下記の方々に調査地の提供等で格別の御尽力、御協力を賜った。記して深甚の意を表します。

大和郡山市九条町306-2 山中敏勝氏

大和郡山市観音寺町22 熊田隆史氏

4. 調査地・調査面積等は下記の通りである。

調査次数	調査地	調査面積㎡	調査期間
第88-2次	九条町306-2	9	1988.12.5～12.14
第88-3次	九条町278	260	1989.2.13～3.30

5. 現地・整理には、下記の作業員、補助員が参加した。（敬称略・顛不同）

（作業員）杉山典三・堀川正治・崎山庄勝・米田利男・岸田勝信・増田高雄・辻本義夫・中川憲・市井義治

（補助員）三枝直通・網島和久・秋山幸枝・荻田智恵美・加藤洋子・竹内直子

また、現地では下記の方々から多くの御教示を得た。記して感謝いたします。（敬称略）

森下恵介・森下浩行（奈良市教育委員会）

宮原晋一（櫛原考古学研究所）

千田剛道（奈良国立文化財研究所）

杉山 洋（国立飛鳥資料館）

6. 本書の執筆・編集は服部が担当した。

## 本文目次

- I. はじめに
- II. 第88-2次調査の概要
- III. 第88-3次調査の概要
- IV. まとめ

## 挿図目次

- 1 調査地位置図 ( $S = 1 : 50,000$ )
- 2 平城京条坊と調査地
- 3 西市跡推定地の空中写真
- 4 条坊と調査地点 ( $S = 1 : 25,000$ )
- 5 第88-2次調査地点 ( $S = 1 : 5,000$ )
- 6 トレンチ配置図 ( $S = 1 : 500$ )
- 7 トレンチ東面西壁土層断面図 ( $S = 1 : 40$ )
- 8 第88-3次調査地点 ( $S = 1 : 5,000$ )
- 9 調査区縦横平面図 ( $S = 1 : 120$ )
- 10 調査区土層断面図 (SD 01部分)
- 11 土坑 SK 01 ( $S = 1 : 30$ )
- 12 井戸 SE 01 ( $S = 1 : 40$ )
- 13 土坑 SK 01 出土土器 ( $S = 1 : 3$ )
- 14 土坑 SK 05 他出土土器・土製品 ( $S = 1 : 3$ )
- 15 井戸 SE 01 出土土器・土製品 ( $S = 1 : 3$ )
- 16 墨書き器 ( $S = 1 : 3$ )
- 17 斎串 ( $S = 1 : 3$ )

## 図 版 目 次

PL 1 (上)トレンチ全景（北から）

(下)土層堆積状況（東から）

PL 2 (上)調査区全景（西から）

(下)S D 01 全景（北から）

PL 3 (上)S K 01 全景（北から）

(下)S E 01 全景（西から）

## I. はじめに

平城京の東西市は、京の経済活動を担っていた官営市場である。多くの品物が売買され律令官人の日常生活を支えていた。東西市の位置について、東市は左京八条三坊に、西市は右京八条二坊に、各々五・六・十一・十二の四坪の市域を有していたと推定されている。現在、この推定比定地の範囲内で調査が実施され、市の構造が徐々に明らかにされつつある。特に東市においては、奈良市教育委員会が計画的な学術調査を実施しており、多くの成果を得つつある。一方、西市においては、マンション建設問題でその保存と保護が社会問題化された1975年以降、市教委が小規模な調査を継続的に行ってきただけであった。いずれも住宅建設に伴う事前調査であり、調査面積が狭いこと、あるいは、中～近世の採土坑による遺構破壊が多かったことなどからかんばしい成果はあがらっていない。しかし、小規模な調査を機会に、地元住民の協力と理解を進めていくことが、今後の計画的な学術調査を行う上で肝要であることに多言を要しない。



fig. 1 調査位置図 ( $S = 1:50,000$ )

ところで、これまでの東西両市の調査では、市を決定付ける遺構や遺物は出土しておらず、市の考古学的確定と実証にはさらなる調査の進展が望まれるところである。一方、東西両市の周辺では奇しくも大規模な調査が実施され、市周辺の坪内利用の一端が明らかになりつつある。すなわち、左京八条三坊九・十坪、右京八条一坊十三・十四坪の調査で、漆器工房や金属器工房に関する遺構・遺物が検出され、その共通する様相から逆説的に市の比定地が首肯されつつあるのである。

いずれにせよ、市域の確定には、推定地あるいはその周辺部での今後の調査の進展に委ねるしかない。もっともそのためには、行政のこれまで以上の積極的な取り組みが必要不可欠ではあるが。当市では、市内遺跡発掘調査事業という国庫補助事業を遂行するに当たり、市内遺跡という漠然とした汎用的名称とはうらはらに、中でも西市跡を最重要の対象として設定しているのであり、当市

の取り組み方次第が今後の調査の明暗を分けることにもなろう。

なお、調査次数については、1988年度の通番を付して処理している。

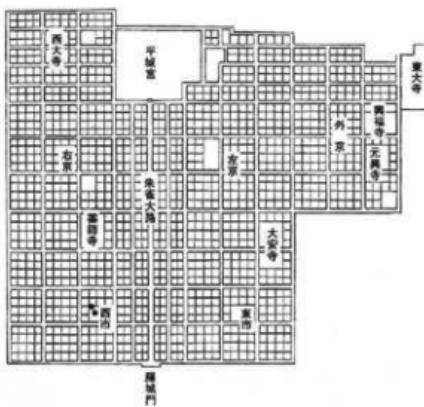


fig. 2 平城京条坊と調査地



fig. 3 西市跡推定地の空中写真  
(昭和59年3月撮影)



fig. 4 条坊と調査地点 ( $S = 1:25,000$ )

### 調査日誌抄

#### 第88-2次

- 12月5日（月）晴 器材等搬入、調査開始  
 12月7日（水）晴 砂層検出、奈良時代の土器片含む  
 12月8日（木）晴 晴壁面精査及び写真撮影  
 12月9日（金）曇～雨 写真撮影及び平板測量  
 12月12日（月）晴 埋戻し開始  
 12月14日（水）晴 埋戻し終了、器材撤収を行う

#### 第88-3次

- 2月13日（月）晴 調査開始  
 2月15日（水）晴 表土層掘下げ開始、トレンチは  $260 \text{ m}^2$   
 2月21日（火）曇 包含層の掘り下げを開始  
 3月1日（水）曇 遺構検出作業開始  
 3月3日（金）曇 坊間路西側溝 S D - 01 検出  
 3月6日（月）晴 S K - 01 検出、下層に炭・灰が堆積する。  
 3月9日（木）晴 S D - 01 溝底で杭列検出、護岸施設と思われる。  
 3月15日（水）晴 S E - 01 検出、縦板組井桁出土。  
 3月18日（土）晴 地上写真撮影  
 3月20日（月）晴 遺構平面実測 ( $S = 1:20$ ) 開始  
 3月23日（木）晴 S E - 01 写真撮影及び実測、斎串2点出土、横棟、縦板の手斧痕が著しい。  
 3月25日（土）曇 ピット等断割り、補足実測  
 3月29日（水）晴 埋戻し開始  
 3月30日（木）晴 埋戻し終了

## II. 第88-2次調査の概要

はじめに 昭和62年10月19日、大和郡山市九条町306-2番地における自家用住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が提出された。当該地は平城京の条坑でいう右京八条二坊十・十一坪に当たり、いわゆる西市跡が比定されている重要な地点である。このため、発掘調査の実施について土地所有者と協議を行い、新宅完成後取り壊した旧宅用地内で調査を実施することで双方の合意を得、今回の調査に至ったわけである。敷地全体は十坪と十一坪の両方の坪にまたがっているが、旧宅部分は十坪が大部分を占めるため、十坪の北端部の様相、すなわち両坪を隔てる八条条間路の両側溝の検出を調査の主眼として調査を進めることとした。排土置場の確保などの制約があったため調査面積はわずか9坪に限られたが、以下に述べる成果を得ることができた。なお、土地所有者である中山敏勝氏には調査期間中にも数々の御配慮、御協力をいただいた。記して感謝する次第である。



fig. 5 第88-2次調査地点 ( $S = 1:5,000$ )

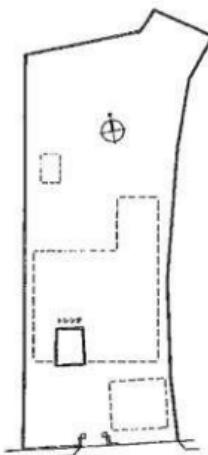


fig. 6 トレンチ配置図 ( $S = 1:500$ )

**調査の概要** 東西2.8m、南北3.5mのトレンチを設定し、手掘りにより進行した。層序は、第①層：コンクリート基礎、第②層：淡灰青褐色土層、第③層：淡灰褐色土層、第④層：淡灰褐色土層、第⑤層：淡灰茶褐色土層、第⑥層：灰色砂質土層、第⑦層：暗灰色土層、第⑧層：灰白色砂層、第⑨層：暗灰色土層、第⑩層：灰白色砂層、第⑪層：灰色砂礫層、である。第⑫層は旧表土であり、以下第⑬層まで中世の土器を含む包含層が形成されている。第⑭層～第⑯層は造構内の堆積土であり、奈良～平安時代の遺物が少量出土している。このSD-01の溝底はトレンチの北に向かって鋭く傾斜していく。溝の肩部は未検出であり、その規模・深さ等については正確な数値を得られなかった。第⑮層は溝SD-01の最上層と考えられるので、その上面から計測すると溝の最深部は1.1m以上となる。なお、第⑯層に形成される砂礫層は、地山である緑灰色砂礫層中に含まれる砂礫の流出によって形成されたものと考えられる。

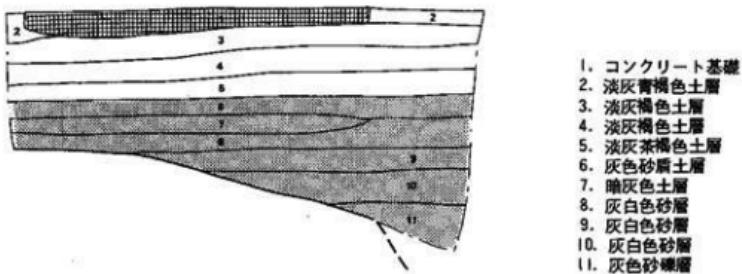


fig. 7 トレンチ東面西壁土層断面図 (S=1:40)

遺物はコンテナーパット1箱分ぐらいである。第⑬～第⑯層からは、土師器24点、須恵器17点、瓦3点、製塙土器3点が出土している。第⑭層からは、土師器22点、須恵器17点、瓦1点が出土している。ほとんどが細片であり図示できるものはない。

まとめ 溝SD-01は東西方向に流れる溝であり、十坪と十一坪を隔てる八条条間路の南側溝の可能性が高いと思われる。溝の両肩部が未検出であり、また、周辺の調査例が少ないとあって、国土座標上での検討が経られないで結論は出しかねる。詳しい点は以後の調査の進展に委ねたいと思う。

### III. 第88-3次調査の概要

はじめに 調査地は九条町字エナン所 278 番地、西市跡推定地のはば中央に当たる。調査地の北側に残る幅約10mの水田地割は、西市跡の中央を南北に走り、市域を東西に分割する八条二坊坊間路の遺存地割と推定されたため、この道路の確認を調査の第一目的とし、併せて西側の十一坪の様相を把握することに主眼をおいて調査を進めた。

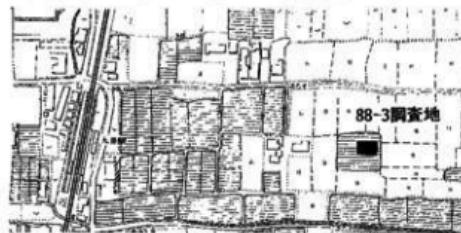


fig. 8 第88-3次調査地点 (S = 1:5,000)

調査の概要 東西20m、南北13mの調査区を設定し、表土層及び床土を重機によって除去し、以下は人力によった。層序の概略を示すと、第①層：表土層、第②層：灰褐色土層（床土）、第3層：茶褐色土層（包含層）、第④層：黄色粘土層（及至青灰色砂層）である。第④層が遺構面となるベース層である。從前からこの地域では、粘土層より成るベースが展開する部分には中～近世の採土坑が認められ、奈良時代の遺構が大きく破壊されていることが多かったが、今回は幸いにもこの種の土坑が少なく、砂層ベースの広範な広がりとともに奈良時代の遺構が多く検出された。

検出した主な遺構は、道路1条、同側溝1条、掘立柱建物4棟、掘立柱塀2条、井戸1基、土坑5基等である。以下、主要遺構について略述する。

**八条二坊々間路SF 01** 六坪と十一坪を隔てる坊間路である。路面は幅約3mにわたって検出されたが、東側溝の西肩部を検出していないため正確な路面幅は不明である。路面の南端部では、瓦・須恵器の小片、小石塊が路面に貼りつけられたような状況が認められた。おそらくは、舗装の痕跡であろう。他の部分では舗装の痕跡は認められなかった。なお、路面上で土坑1基、ピット1基を検出している。

**坊間路西側溝SD 01** 道路SF 01の西側溝、幅約3～4mの南北溝。断面形態は十一坪側、すなわち、その西半分が深く掘削され主流路となる様相である。この深いところでは深約50cm、東半分の浅い部分では深約30cmを測る。断面の観察から最低2時期にわたっていることが判る。古い時期の溝（A期）は、西肩部に残る茶色砂層を留めるものである。溝底には杭列が認められた。溝の全域で検出されたので、橋脚とは考えられない。おそらく、A期の溝内堆積土である茶色砂層の崩壊を防ぐために新しい時期（B期）に造営された護岸施設と思われる。横架材は検出していない。コンテナ約30箱分の瓦片類・土器類が出土した。なお、東半分の浅い部分の中でも、特にその北端部は南北約1.5mの範囲でさらに一段浅くなってしまっており、道路面からわずかに20cm低くなっているに

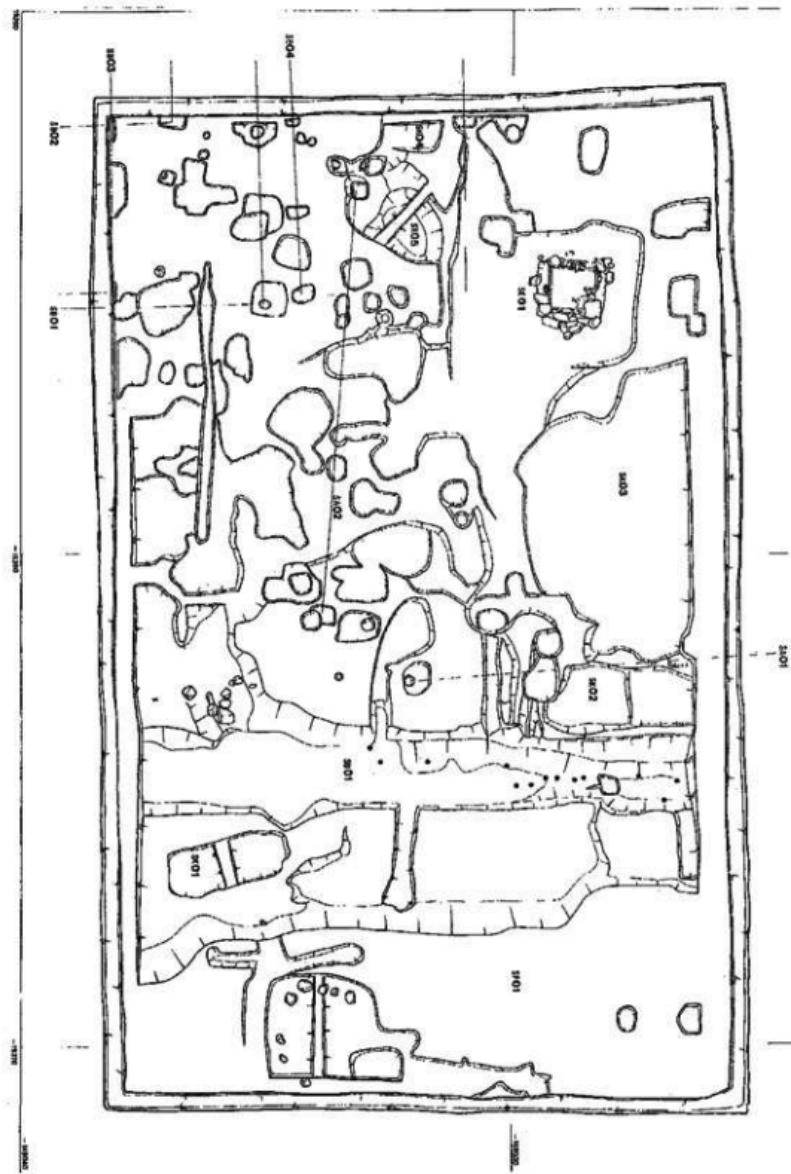


fig. 9 調査区構造平面図 ( $S = 1:120$ )

すぎない。この部分は、十一坪を南北に2分する位置であり、道路から十一坪内へ入るための何らかの施設があったかもしれない。

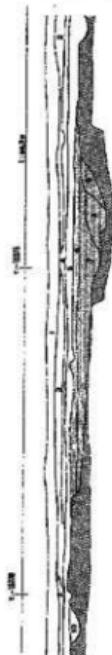


fig.10 調査区土層断面図 (SD-01部分)

1. 表土層
2. 灰褐色砂質土層
3. 淡灰褐色砂質土層
4. 淡灰色土層
5. 灰褐色土層
6. 淡褐色土層 (SD-01内推積土)
7. 暗灰色土層 ( )
8. 灰茶色砂層 ( )
9. 茶色砂層 ( )
10. 暗灰褐色土層

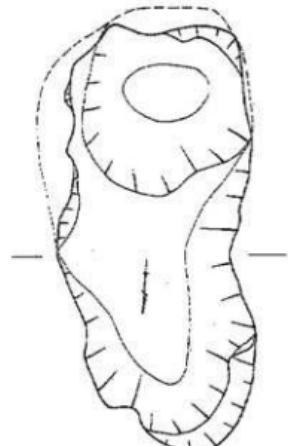


fig.11 土坑SK-01 (S=1:3)

1. 灰褐土
2. 暗灰色土
3. 黑灰色灰層
4. 暗灰色粘土
5. 緑灰砂質粘土



**土坑SK-01** 長さ約2.6m、幅約1.0m、深さ約0.5mの不整形土坑。壁部の一部、特に東南辺では、えぐりとるようにオーバーハングする。南半部は径約1.0m、深さ約0.7mで円形土坑状となり、灰色砂層と植物片を含む土層が堆積する。中央部の横断面では、①灰褐色土、②暗灰色土、③黒灰色灰層、④暗灰色粘土、⑤緑灰砂質粘土が堆積する。

**土坑SK-02・03・04** 中～近世の採土坑である。

**土坑SK-05** 長径約2.2m、短径約1.7m、深さ約0.2mの浅い不整形土坑。①黒色灰層、②淡灰褐色土、③灰褐色土、④黒褐色土が堆積する。

**建物SB-01** 調査区の南西隅で検出。建物の北東隅部であり、棟方向、平面規模は不明。柱掘方は不整形なものもあるが方約70cmと比較的大きい。柱間は6尺等間である。

**建物SB-02** 2柱穴しか検出できず、詳細は不明、柱間は8尺である。

**建物SB-03** 南排水溝で確認した建物の北東隅部。1間分の検出のみであり詳細は不明。

**建物SB 04** 柱行2間以上、梁行2間の建物。柱掘方は一辺約30cmと小さい。柱間は6尺等間である。

**塙SA 01** 南北塙、2間分を確認、SD 01から約1m離れている。柱間は9尺等間である。

**塙SA 02** 3間分を検出、東西塙である。柱間は9尺等間、柱掘方は小さく不整形である。

**井戸SE 01** 掘方は、東西約4.8m、南北約2.8mの隅丸長方形と思われる。南半部では明確に検出していない。北寄りの位置に井戸枠を組む。井戸枠は、その下半部を各辺2枚からなる縦板組、上半部をより幅の狭い縦板を組んだものであり、隅柱をもたず、横棟で側板を受ける構造である。下半の縦板は、幅約50cm、長約105cm、厚約5cmの部厚い材を用い、各辺とも2枚組みとする。縦

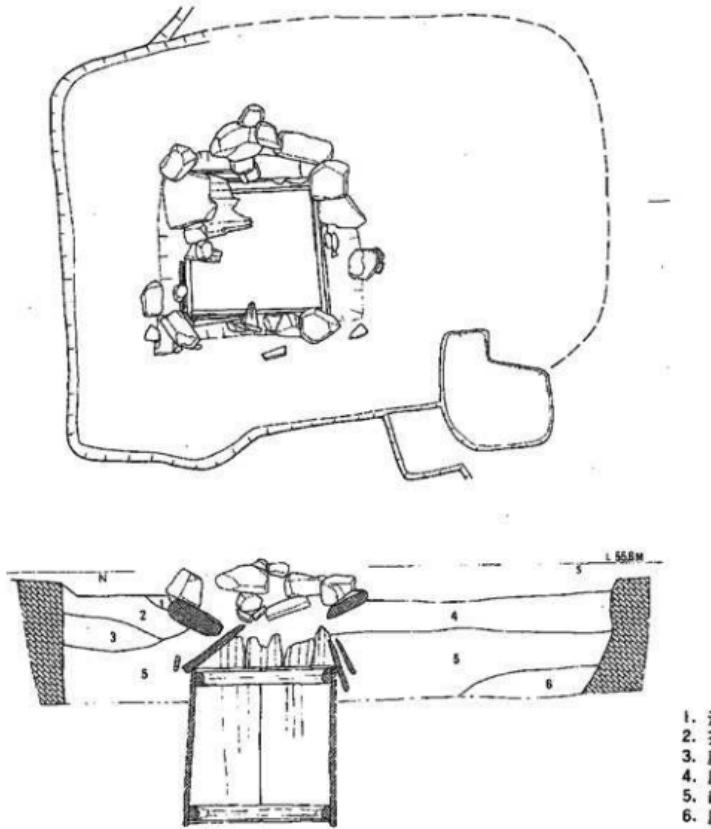


fig.12 井戸SE-01 (S=1:40)

板の上端、下端に幅約10cmの横桟をわたす。横桟は丸材を半裁したもので、手斧による整形痕が著しい。上半部は、下半縁板の外側に幅20~40cmの縦板を組む。横桟は検出されなかった。上部には石組みがあり、瓦埠類・土器類もその間隙に埋め込まれている。井戸枠の内法は約95cm、井戸底まで約170cmを測る。井戸枠内堆積土、特に上層から多量の土器が出土した他、斎串2点、土馬なども出土している。

**出土遺物の概要** 出土総量で通常のコンテナ約50箱である。ほとんど未整理の状況なので、目立ったもののみ報告する。

### 土 器

#### 土坑SK 01 出土土器 (Fig 13)

1は壺B、口径11.7cm、器高9.0cmで、平底に近い底形をなす。体部外面には粘土紐の繋目が残り、全体に手づくり土器の感じがある。内面には漆が付着し、一部口縁内面、口縁外端部に漆が及ぶ。漆塗として利用されたものである。2は杯A。口径20.8cm、器高3.9cmを測る。内底面には粗いラセン状暗文、体部内面には斜放射状暗文と連弧暗文を二段に施す。外面下半はへら削り、上半にへら磨きを施すb<sub>1</sub>手法である。3は壺の蓋、口径13.0cm、器高2.5cmを測る。口縁外面までへら削りが及ぶ、回転ナデで仕上げる。つまみは扁平な様態。外面には自然釉が付着し、一部肌が欠けている。4は杯B、口径16.3cm、器高4.9cm、底部外面はへら切り後かるくナデるよう、へら削りは施さない。5は杯A。口径16.0cm、器高3.6cm、底部外面はへら切り後、粗いナデで調整する。

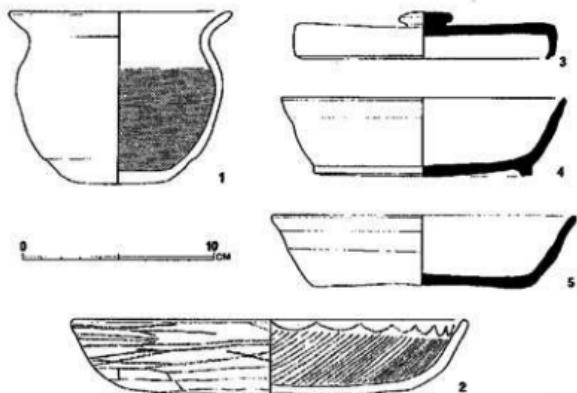


fig. 13  
土坑SK-01出土土器(S=1:3)

#### 土坑SK 05 出土土器 (Fig 14-1~3)

1~3ともに杯B蓋である。1~2は口縁より天井部が下方に出る口縁A形態の退化形式。1は

口径 19.0 cm、器高 1.9 cm、2 は口径 19.8 cm、器高 1.6 cm である。いずれも天井部はヘラ削り後ナデを施し仕上げる。3 は口縁 B 形態、口径 21.6 cm、調整は 1・2 とほぼ同じであるが、焼成が甘く灰白色を呈する。

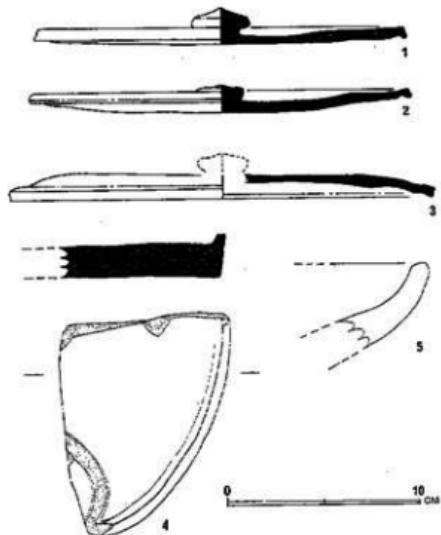


fig.14 土坑SK-05他出土土器・土製品(S=1:3)  
1~3:SK-05  
4:SD-01 土層  
5:包含層

#### 井戸 SE 01 出土土器 (Fig 15)

1 は碗 A、口径 12.4 cm、器高 3.5 cm、体底部外面にへら削りを施し、内面をよこなでする Co 手法。2 は皿 A、口径 14.6 cm、器高 3.4 cm を測る。口縁外面までへら削りが及ぶ Co 手法である。3 は皿 A、口径 16.6 cm、器高 2.6 cm、Co 手法である。4 は杯 A で、口径 16.6 cm、器高 3.9 cm、Co 手法、内面はよこなでである。砂粒を多く含む粗い胎土。底外面に墨書きの痕跡があるが判読できない。5 は皿 B 蓋。口径 26.2 cm で、つまみを欠失、天井部はへら削りの後へら磨きを加える。

#### その他の土器・特殊土製品 (Fig 14-4・5、Fig 15-8・9、Fig 16)

##### 墨書き土器 (Fig 16)

SE 01 上層出土。口径 18.6 cm、器高 2.7 cm の皿 B で、底部は高台より下に出る。底部外面にへら削り、体部・口縁部外面にへら磨きを加える C<sub>1</sub> 手法である。底外面のはば中央に「大」の墨書きがある。

##### 観 (Fig 14-4)

SD 01 上層から出土。観の一一部である。高約 0.5 cm、幅約 0.5 cm の外堤、及び幅約 0.8 cm の内堤がある。陸部には擦痕が著しく、器表が剥げている。底面及び側面はへら削りの後、ナデで丁

率に仕上げる。

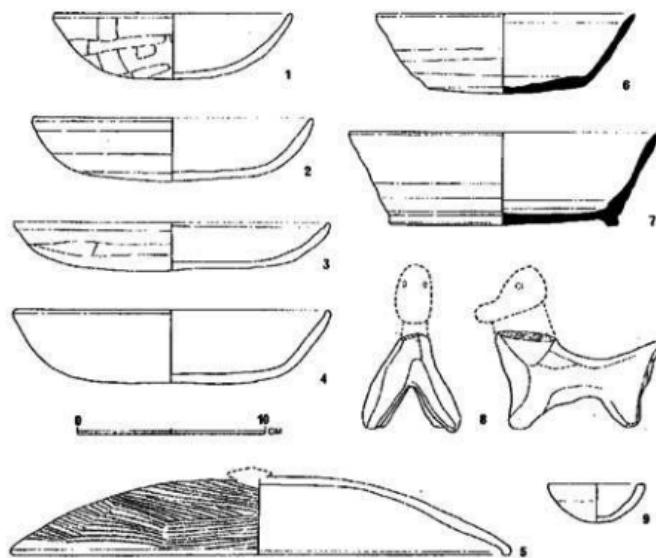


fig. 15 井戸SE-01出土土器・土製品(S = 1:3)

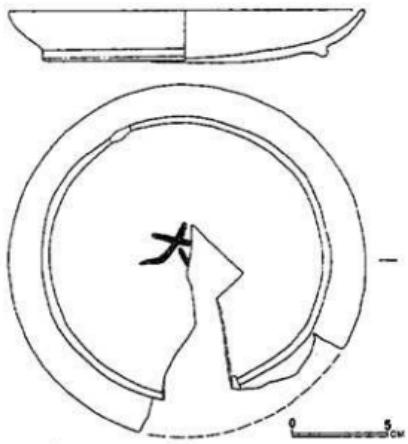


fig. 16 墓土器(S = 1:3)

### とりべ (Fig 14-5)

包含層出土。外容器をもたない楕形のとりべである。器厚は 1.5 cm 前後で、底部へいくほど厚くなる。内面は平滑、外面には成形時の指頭痕が若干残る。口縁外壁部を面取るように調整する。内面には溶銅滓が付着し、灰色に変色している。

### 土馬 (Fig 15-8)

S E 01 上層出土。簡略化の進んだ小形の土馬で、頭部を欠失する。手綱や鞍の表現もなく、四肢や尾部はひねり出してつくる。腹部面がくぼむ。

### 小形模造土器 (Fig 15-9)

S E 01 上層出土。瓶の模造土器で退化が著しい。復元口径約 5 cm を測る。外面に粘土の接合痕が残り、口縁は水平な面をなす。なでを主体に調整し、底部の穿孔はない。

### 木製品

#### 薺串 (Fig 17)

いずれも S E 01 中層出土。第 1 段目の横棧から約 60 cm の深さで、棒板にそえかけるような状態で出土した。薄板の先端を剣先状に尖らし、上端を圭頭にかたどる形で、1 は全長 17.3 cm、幅 2.1 cm、3 条の切り込みを入れる。2 も 1 とほぼ同じ大きさで、切り込みは 2 条と推定される。上端の方形の切り込みが特徴的である。

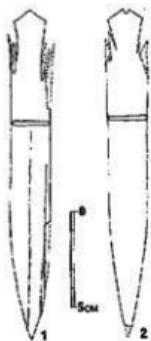


fig. 17 薺串 (S = 1:3)

## IV. まとめ

これまでの西市跡推定地で行われた調査では、中世～近世にかけての粘土探掘坑が多く検出され、奈良時代の遺構の多くが破壊されている場合が多かった。しかし、今回の調査では、良好な粘土層（ベース層）が広がっているにもかかわらず、案外探粘坑は少なく、多くの成果を上げることができた。調査面積の制約から、建物配置などはよくわからなかったが、推定四坪城の中央に、道路が存在することがわかった。東側溝が未検出であるので正確な道路幅員は不明とせざるをえないが、

東市第6次調査の成果と同様、市中央部の条坊計画の復元にとって良好な資料となろう。

また、西側溝内で検出した土坑SK01も注目されると思う。灰炭層が厚く堆積するこの種の不整形な土坑は、隣接する右京八条一坊十三・十四坪で多数検出されており、フイゴ羽口、トリベ、鉛津の出土から鍛冶炉の可能性も考えられている。今回、この種の遺物は、SK01内からは出土していないが、包含層からトリベの破片が1点出土しており、鍛冶にかかわる何らかの施設があったことも推定される。一方、東市跡ではこの種の遺構や遺物は出土しておらず、若干の様相の違いがあるようにも思えるが、現時点では市域を確定する資料でもなければ、否定する資料とも言えないわけで、市域の確定には以後のさらなる調査の進展に期待したいと思う。



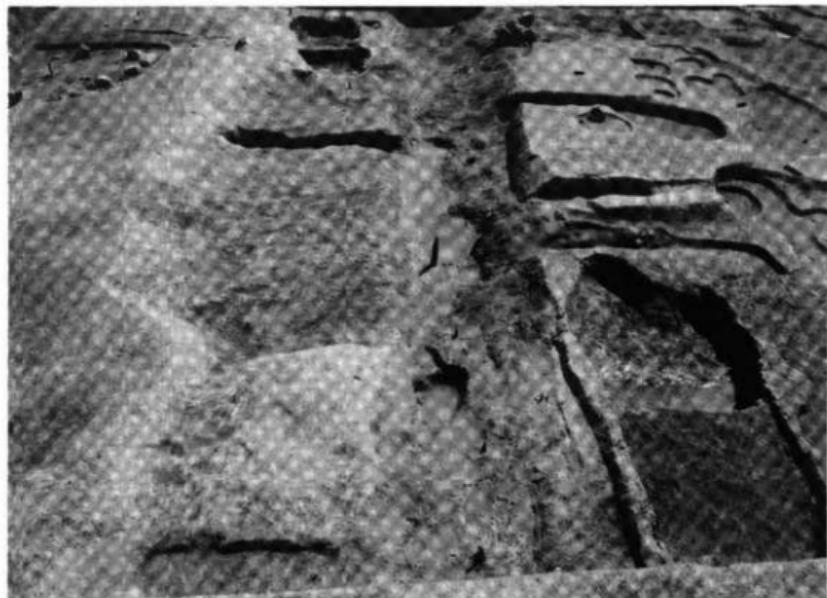
トレンチ全景（北から）



土層推積状況（東から）



調査区全景（西から）



SK-01 全景（北から）



SK-01全景（北から）



SE-01全景（西から）

大和郡山市文化財調査概要15  
平城京右京八条二坊十一坪（西市跡推定地）  
発掘調査概要報告書

発行 平成2年3月20日  
編集 大和郡山市教育委員会  
奈良県大和郡山市北部山町248の4  
〒639-11 電 (07435) ⑧1151  
印刷 株式会社 昭文社